

演題 19. 当院における骨髄浸潤を呈した悪性リンパ腫の検討

○早川裕子 浪川薫 岡澤恵美子 脇田智恵子  
(社会保険船橋中央病院) 深澤元晴(同血液内科)

<目的>近年、悪性リンパ腫の発生頻度が増加傾向にあり高齢化も一因と考えられている。今回我々は、当院で悪性リンパ腫と診断され骨髄浸潤を呈した症例を検討したので報告する。

<方法>2000年から2006年の7年間に骨髄穿刺を施行した悪性リンパ腫130症例について検討した。性差・年齢・骨髄生検・CT・末梢血の血液像・フローサイトメトリー(以下FCM)・FISH法・発症部位について検討した。

<結果>①性差別比率 男(78):女(52) 1.5:1.0

②年齢別比率 20代1.5%、30代3.9%、40代6.2%  
50代23.9%、60代30%、70代27.6%、80代6.9%

③型別 ホジキンリンパ腫7.4%、非ホジキンリンパ腫92.6%④DLBCL58.9%、FCL21.3%、MALT3.3%  
辺縁帯B細胞リンパ腫3.2%、マントル細胞リンパ腫1.7%、バ-キットリンパ腫1.7%、ATL 1.7%、  
AILT6.5%、NK/T細胞リンパ腫1.7%

④骨髄浸潤(+)は4例あり DLBCL1例、FCL2例、  
B細胞リンパ腫1例であった。⑤DLBCL症例は  
鼠径部原発、生検(-)骨髄(-)CTにて浸潤を認め  
染色体転座有り。左腋下部原発のFCLは、免疫染色  
L-26(+)、LCA(+)FCMはCD19、20を示し、末梢  
血に異常細胞多数出現し、転座を認めた。左顎下  
原発FCLはCD10、19、20を呈し染色体は正常で  
あった。骨髄原発B細胞リンパ腫症例はL-26(+)  
CD79a(+),FCMはCD19、20を呈し転座を認めた。

<まとめ> 骨髄穿刺を施行した悪性リンパ腫の  
3.1%に骨髄浸潤を認めた。DLBCLは1.7%、FCL  
は9.4%の浸潤であった。メイギムザ染色での評価  
には限界があり、さらにFCM、FISH法を併用する  
ことにより検出率は増加するものと考えられる。  
連絡:047-433-211(内線2602)